木村文助研究

通信　22号　2010・11・4

合唱劇「村に咲く花」発会式

七月五日、北斗市総合文化センターで「永遠にあかるく音楽会実行委員会」主催の「木村文助先生と子供たちの綴り方」を盛り込んだ「村に咲く花」合唱劇発会式が開かれた。地元合唱団員、新たに加わった人、児童・生徒ら約百人が参加し開かれた。

実行委員長熊本昇氏の開会挨拶、市長高谷寿峰氏、文保研会長木下が来賓の挨拶をした。

事務局長前田治氏から開催の趣旨と経過報告があり、地元演出家の中村勝雄氏と東京の作曲家萩京子氏からそれぞれ合唱劇への思いと期待が述べられた。スタッフの紹介があって会を閉じた。

合唱劇の練習が一一月から本番に入る。

○開催：平成23年2月6日（日）午後2時

○会場：北斗市総合文化センター

募金のお願い！

実行委員会では三百万円ほどの費用がかかるため一口千円の募金を呼びかけています。ご協力のほど、よろしくお願いします。

文保研展示会

合唱劇に協賛し展示会を計画している。

◎二〇一一年二月一日（火）～七日（月）

九時～一七時

◎北斗市総合文化センター

『綴り方指導者木村文助の業績』

一〇年

四・二四　文保研総会、合唱劇支援を決める

五・一　北海道文化財保護協会「文化情報」の読者の声覧に「木村文助綴り方が合唱劇に」が載る

五・六　「木村文助研究」通信№21発行

五・二九　「故郷を思って一緒に歌おう」函館新聞

七・一　会報「ぶんぽけん」189号に合唱劇実行委事務局長、前田治氏の文載る

七・三　「村に咲く花」合唱劇発会式・北斗市文化センター

七・五　「創作合唱劇成功誓う」・北海道新聞。同日「合唱劇の成功誓う」・函館新聞

八・二三　北斗市教育広報「きらめき」⑰号連載『赤い鳥』に載った郷土の作文「納豆売り（推奨）大野小尋五田山みつ」

一一・一　北海道文化財保護協会「文化情報」の読者の声覧に「綴り方を合唱劇に」が載る

連載『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子供たちの綴方（作文）や絵を投稿し次々と入選。「日本一の綴方学校」といわれました。

ある婆さん（推奨）

大野小尋六　吉田孫七

雪がそろそろ（静かに）降り出した寒い晩です。夜中にふと目をさましたら、後は寝苦しくて眠られません。何だかおかしい（変な）気味のわるい晩だと思いながら、だまって目を閉じていると、ずっと遠くの方で「助けてけろでぁ（助けてくれ）」と言っているような「火事だぁ」と言っているような声が聞こえます。私は初め鶏でも鳴いているのだろうと思っていましたが、よく聞くと、たしかに「助けてけろでぁ」と聞こえるので、お祖母さんを起こすと、「何した（どうした）」と言ったので、「あれ、一木（屋号）の田の方で何だかづなっている（怒鳴っている）と言ったら、「どれ」と言って聞いていましたが、すぐお祖父さんをゆり起こしました。お祖父さんは耳のところへ手をやって「うむ、一木の田の方だ。與一さんば（を）起こせ」と言ったら、お祖母さんが「與一さん、與一さん、大変だ」と言いますと、初め名を呼んだ時はだまっていたが、大変と聞いて、すぐ飛び起きて、お祖父さんと二人、支度をして出て行きました。そのうちに、皆起きてきて、耳に手をやって聞いて「何したのだべな（だろうな）」と言っていましたが、間もなく、何も聞こえなくなりました。

お祖父さんたちが出て行ってから一時間近くもたった頃、がらり戸が開いたので、はっと思って見ると、まっ先にお祖父さんが小さい子供を、わきの下へかかえ、片手に提灯を持ち、與一さんは六十（歳）ぐらいの、髪のばらばらになったおばあさんをおぶって入って来ました。それから大さわぎしてわら火をどんどんたきました。おばあさんは死人のように青く気味わるく、ぐたり（ぐったり）しており、子供は三つぐらいで、とぼけたように私らを見ていました。お祖父さんは「おれぁ、外さでだけぁ（外へ出たら）一木の田の方でも、づなっているようだし、山丁（屋号）の田の方でもあるようだしけぁ（だから）、どっちだが分がらねくて（どっちか分からなくて）、まず一木の田の方さ行ったけぁ（へ行ったら）、小川の雪の中で、こら、このわらしぁ（子供が）『婆、あがりこぁ、めでぁ（あかりが見えたよ）』て、さべっているしけ（しゃべっているから）、すっかり見だけぁ（よく見ると）、下に婆倒れであったね（倒れていたんだ）。婆、今死ぬが生きるがも知らねで（知らないで）、さべっているもんだね（しゃべっていたもんだ）」と言って、鼻汁（鼻水）をすすり上げました。

そのうち、だんだん夜が明けて来た頃、そのおばあさんも、やっと正気づいてきました。その話によると、八軒家（稲里の旧地名）の嫁取りに行って、手一ぱい（思い切り）さわいで、酒に酔ったので、その家でむりにとめようとしたのを、おじいさんに叱られるからと言って、一升瓶（酒）までもらって来て、もう少しで一木の田だなと思いながら来たら、狐にだまされたようになって、どこに行っていいか分からなくなって、うろうろしているうちに、川に落ちて、雪が腰までかかったので、「助けてけろでぁ」と人を呼んでいるうちに何も分からなくなったのだそうです。

（大正十五年十二月号）

■ことばの意味

【わら火】わらを燃やした火。燃えやすいので、すぐに温まる。

【嫁取り】嫁を迎えることやその儀式。当時、自宅で行われていた結婚式のこと。

綴方選評（抜粋）

鈴木三重吉

吉田孫七君の「ある婆さん」は、把握の確かな、引き締まった作編である。叙写が印象的に絞り出されているために、いちいちの推移が、あたかも掘り刻んだように、わずかなの言葉で、まざまざと陰影的に浮かび躍っているところを注意されたい。最初に吉田君が人の叫び声を聞いてお祖母さんを起こし、お祖母さんがさらにお祖父さんや與一さんを呼び起こす描写も、あれだけの簡単な表出で、しいんとした夜中の凶悪を予感するうす気味悪い感じが出ている。やがて、がらりと戸が開く、はっと見ると、お祖父さんが子供をかかえ、片手に提灯を持って入って来られる、あとから與一さんが髪を振り乱したお婆さんをおぶって入って来るところも、さも目の前に見るようで、ぞくりとするではないか。特にお祖父さんが二人をすくい上げた手つづきを話す簡単な対話や、お婆さんが正気づいてから話した間接話がまるで現場を見るような印象を刻みつける。すぐれた把握とするどい感受の誇るべく好例である。お婆さんが雪の積もった川に落ちて昏倒している、小さな子供が生死の境にいるのも分からないで、おばぁ、明かりが見えた、と回らぬ舌で言いながら、一人たたずんでいる光景は、日常では想像もつかない凄惨さである。第一、酔っぱらいのお婆さんが雪の夜中に小さな子供を歩かせて野中を帰って来るというのが、あまりに乱暴である。人間の生活の一面を記録している意味で、かなりの深刻さをもった作編と言わねばならない。

（教育課　八木橋直弘）

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子供たちの綴方（作文）や絵を投稿し次々と入選。「日本一の綴方学校」といわれました。

納豆売り（推奨）

大野小尋五　田山みつ

この間の晩、私の家で、横山のおど（お父さん）と中谷のもどさんが来て、肉の鍋をかけて酒を飲んでおりました。私は奥にいて遊んでいると、「お晩です（こんばんは）」と言って入って来た人があるので、出てみると、冬になると納豆を売りに来る「馬鹿納豆屋」といわれている女でした。母がキャベツを切りながら「今頃何してここさまごづで来てぁ（こんな時間にどうしてここにうろついて来たのだ）」と言うと、「今日、納豆早ぐ売れだしきゃ（納豆が早く売れたから）、他の家さ大根の草取りに手伝いして湯さ入ったけぁ（風呂に入ったら）、おそぐなったし、市渡さ行く気（に）なったけども、てぎだしけ（面倒だから）、ここさ寄って来たのせ（ここに寄ったんだ）」と言うと、酒に酔った中谷のもどさんが「何？　したしけ泊めでけろてな（だから泊めてくれと言うのか）。おれァ、汝は（おまえが）大きらいだ。汝えんたやづば（おまえのようなやつを）誰も泊めねえだで、ぐぐどけづがれ（すぐに帰れ）」と言った。すると納豆屋は「誰ァ汝さでも泊めでけろつんでもあめし（おまえに泊めてくれと言ってるのでもないのに）、それごそ汝えんたやつの厄介になんてならねえだ。わがねてば（だめだと言うなら）行ぐし」と言うと、もどさんが、「そら、やっぱり泊めでけろてんだべね、わがね（だめだ）」と怒鳴った。今度は納豆屋は母の方を向いて「母ちゃ、ごろねでもさせでけせえの（ごろ寝だけでもさせてくれないか）」と言った。母は「知らねえでぁ（知らないよ）、おら家のおどから聞いてみねが（うちの父さんに聞いてみな）」と言った。すると父は「わがね、わがね、おら家さ、この人たち皆泊まるんだしけ（泊まるのだから）」と言った。「何して（どうして）この人たち（が）泊まるてが（泊まると言うのか）。わがねてば行くどもせ（行くけれども）。何、食わせでけれ、飲ませでけれ、てもんでもあるめし（食べさせてくれ、飲ませてくれと言うのでもないのに）」

納豆屋は平気で庭に立っていた。すると横山のおどが「ああ、泊まれ、泊まれ。何この家でわがねぇば（ここ家がだめなら）、おら家さつれで行ぐぁ（自分の家に連れて行くから）、上がれ、上がれ」と言った。納豆屋は「お父さん、ほんとうに泊めるがね（泊めてくれるかい）」と父に聞いた。「したら泊まねが（それなら泊まればいいだろう）」と父が言うと、納豆屋は乱気に（必死に）なって靴を脱いで上がった。そして座るか座らないのに、横山のおどが「そのかわり歌うたわねば泊めねえぞ」と言うと、「歌だら何ぼでもうたうども（歌ならいくらでも歌うけれど）、そら行げ行げて言うんだば（帰れ帰れと言うなら）、今から行ぐんだぇ（今すぐ行くよ）」と言った。横山のおどが納豆屋に盃をのべた（差し出した）。すると酒を飲んでは肉を食い食いして歌った。母が「あねさん飯（ご飯）やるか」と言うと、「うん少し貰うかな」と言ったので、一ぱいやると、もう一ぱい、もう一ぱいと四はいものべた。すると、もどさんが「何でい、汝食わねえ飲まねえてで（と言っていて）、ぐぐどけづがれでぁ。汝いんた者に用ねえ（おまえのようなやつに用はない）」と言うと、納豆屋が「おやおや、お前ばだっけ（おまえのことは）一生信用しねぇ」と言って黙っていた。少したつと父が「ほんに（ほんとうに）行ぐところあるんだら行った方がいいでぁ」と言った。そうしたら納豆屋は怒って、「したら、なして（どうして）早くから言ってけねがった（くれなかった？）。何ぼ（いくら）何でも、こったらに（こんなに）おそぐなったら、他人だもの気の毒だ」と、ぶんぶん言って立った。もどさんが「おお汝いんたやつ、怒ったて何おっかねってな（怒ってもなにも怖くない）、ぐぐど行げ」と言った。納豆屋は、小言を言いながら出た。

その後から私も出てみると、大野方（現在の北斗市本町の方向）から木炭つけた（木炭を積んだ）馬車が来た。「あんさん、乗せてけせでぁ（にいさん、乗せてくれないか）」と言うと、馬車追いは「おそぐ行ぐんだしけわがねぃ（遅くなってから行くのだからだめだ）」と言って馬車を走らした。納豆屋は「それでもいいしけ（それでもいいから）、乗せてけれ（乗せてくれ）、乗せてけれ」と言いながら、馬車の後から走って行った。

（昭和二年三月号）

■ことばの意味

【馬車追い】馬車・馬橇を使って運搬を業とした者のこと。

綴方選評

鈴木三重吉

五年の田山さんの「納豆売り」は、分かりにくい方言が多くて、ちょっと読みづらいが、ともかく少しうす馬鹿らしい物売りの女そのものが、哀れっぽく立体的によく描けている。そのほかのすべての人々の言動も気分の動きも、それぞれに躍出している。人間描写のすぐれた一例として光っている、哀感的な作品である。

（編集・教育課八木橋直弘）

赤い鳥・木村文助コーナー

《北斗市郷土資料館内》

北斗市郷土資料館（旧大野町郷土資料室）
０４１－１２０１
北海道北斗市本町２丁目１２番７号
TEL（０１３８）７７－６６８１

閲　覧　９：００～１６：００
休　館　年末・年始、臨時

生活綴り方のふるさとを訪ねてみよう！

（「赤い鳥」復刻版全巻、木村文助編著書、写真など多数）

○函館方面→車で、国道２２７号を通り大野市街地へ入る
○道北方面→車で、国道５号の大沼トンネルを抜け、１０分ほどして大野方向へ右折し、更に市街地へ進み５分で着く

大野地区市街地の大野小学校門を入り右側木造の建物

発行・大野文化財保護研究会
（略称；文保研・ぶんぽけん）
会長；木下寿実夫
〒四一－一二〇一
北斗市本町六八
（０１３８）７７・８５３５